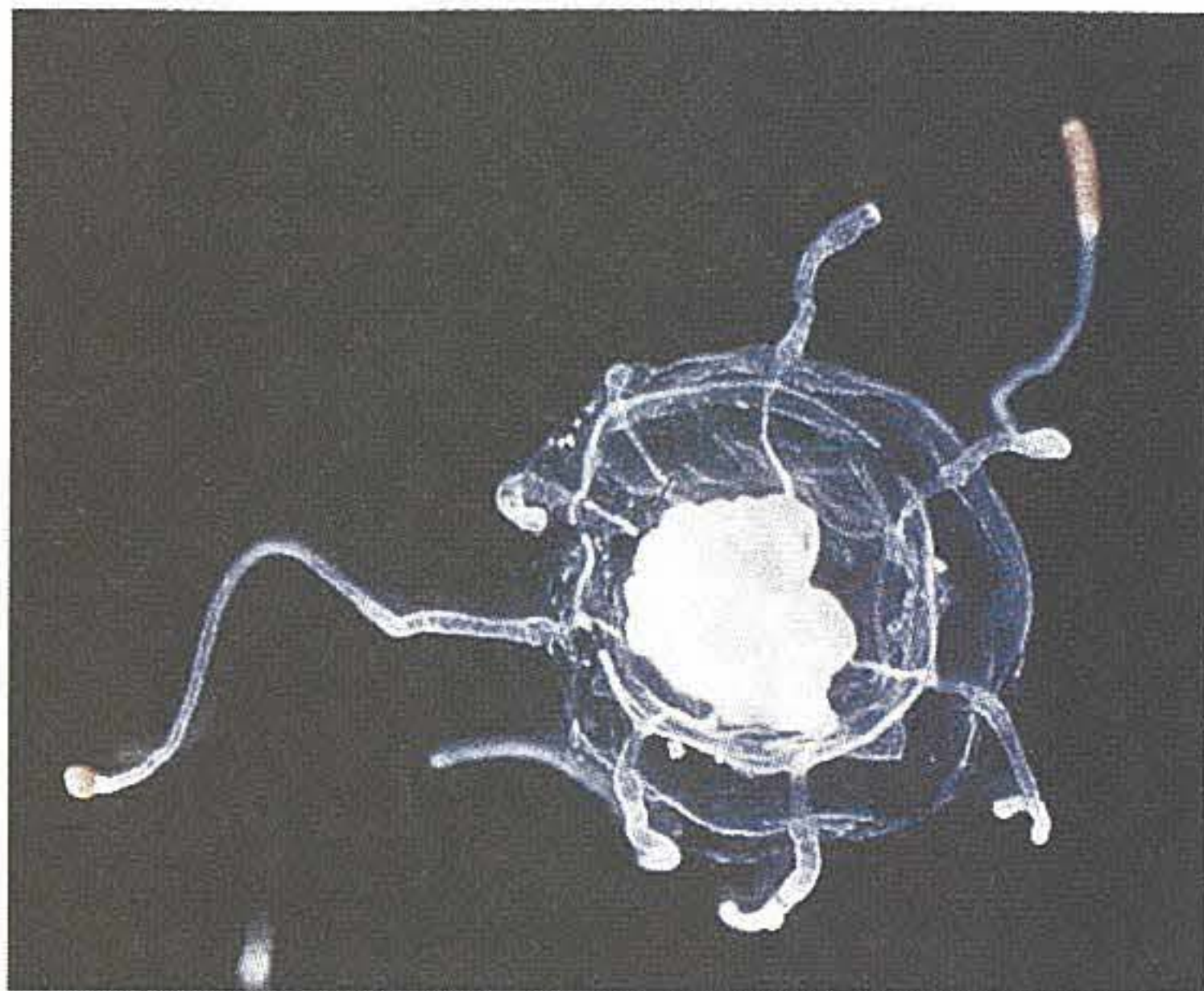


ホヤノヤドリヒドラの一種



日本未記録のホヤノヤドリヒドラの一種

久保田 信

61



このホヤノヤドリヒドラの一種とみられるクラゲは、日本未記録種であるが、正体ははっきりしない。日本からは田辺湾だけで採取されている。

る。2002年夏、当時大学院生だった河村真理子さんによって、1個体だけ採取された。その後も探しているが見つかっていない。
本種は直径が数ミリのヒドロクラゲで、触手は8本ある。この触手がいずれも特異的で、刺胞のないすりすりとした長い部分のその先が膨らんでいて、色付けられている。この個体は触手が取れたり、体がしわくちゃになったりして傷んでいる。ただ、これくらいなら、柔らかいクラゲでは、まだましな方である。

体の中にあるのが胃袋だが、ここの膨れ過ぎていて、形態がはっきりしない。どうやら口唇はなさそうである。成熟しているかどうかも分らない。
放射管は少なくとも4本は存在しているようだ。日本ではこのクラゲのポリプと推察されるものがただ一度だけ知られている。島根県隠岐諸島の産のホヤに共生していたもので、ホヤの分類の大家である京都大学瀬戸臨海実験所出身の西川輝昭博士によって発見された。筆者と恩師の山田真弓先生と2人で、このシロボヤモドキの入水口の内部に付着している群体を、西太平洋からの初記録として、1988年に記載した。

これと類似のポリプはアメリカ西海岸のマボヤなど7種のホヤ類から知られており、そのクラゲは飼育により生活史がある程度分かっている。それは画像のクラゲに類似しているのも、今回思いきってその仲間とした。
このクラゲがどこからやって来たのかは不明であるが、この個体がもし未成熟の若いクラゲだったら、田辺湾に生息するホヤにポリプが共生している可能性がある。

(京都大学准教授)